

平成23年度事業報告・収支計算書

海外事業

ジャイラホーム支援事業

実施場所：サンバレス州カスティリヤホス行政区マグサイサイ町

実施期間：平成 23 年 1 月～同年 12 月

ジャイラホームはフィリピンの NGO によって設立され、孤児、虐待、育児放棄、貧困など様々な背景によって、親元を離れたこどもたちが生活する児童養護施設です。ACTION 設立時の 1994 年から継続して支援を実施しています。施設運営の自立・こどもたちの生活環境の向上等を目的とする本件では、本年度は下記 3 つの活動を実施しました。

●児童養護施設の自立的運営に向けた農業支援

本件はジャイラホーム内の空き地を菜園として開発することで、無農薬栽培によるこどもたちへの安全な食の提供、収穫物の販売による同施設の自給自足体制の確立を目的としたものです。通年の活動として本格的に活動を開始してから 5 年目に当たる本年度は、昨年に引き続き、収穫の安定と、菜園の独立採算化を目標として、苗床の作製、野菜の植え付け、栽培、市場や施設周辺での販売を行いました。

1.3 ヘクタールを農地として利用し、大根、ナス、オクラ、ニガウリ、ウポ、チリ、トマト、カボチャ、チンゲン菜等を栽培しましたが、雨季の間の例年以上の強い雨により被害を受けた野菜も多く、前半で苦戦し大きく収穫が落ち込んでしまいました。昨年度 10 月にクヤママルが退職となり、それ以降はクヤママルの弟であるクヤアンディーが 1 人でスタッフを務めていましたが、本年度 10 月に再びクヤママルが農業スタッフとして復帰、一から計画を練り直し、10 月にトラクターを借りて土地全体を耕すなど大幅な改革を行いました。その成果もあり、年度末には例年に近い収穫を徐々に取り戻す兆しを見出すことができました。

本年度によりスタッフ間同士でのミーティングの機会もさらに増やし、季節ごとの土地利用計画書・目標収穫量を現地農業スタッフ自身で作成するなど日本人スタッフから自立した土地管理・作付け計画も行いました。本年度の収穫物は施設のこどもたちの食用として供給するにとどまり、余剰分を販売するところまでは至りませんでした。来年度も独立採算に向けて、より効率的な土地利用計画・損益評価をし、より綿密な計画をたて現地スタッフとともに実行していく予定です。



耕し直した農地



順調に育つトマトの苗



食事中の子どもたち

●空手を通した青少年育成プログラム

本プロジェクトはこどもたちが空手の修養を通して忍耐力を養い、強い意思や規律、礼儀を身につけて社会に出ていくことを目的とした青少年教育です。昨年度に引き続きジャイラホーム内に設置された極真空手道場で現地指導員のもと、週5日稽古が行われ、施設のこどもと地域のこどもが共に稽古に励んでいます。本年度より ADB（アジア開発銀行）道場の生徒さんたちとの合同昇級審査の形をとり、4月と7月、12月の計3回ジャイラの道場で昇級審査が行われました。また3月に行われたスタディーツアーに合わせ、約2年ぶりとなるビーチトレーニングを実施。5月にはマニラで行われたアジア大会へ見学に行き、世界レベルの試合を見て、試合での技術や緊迫感を生で体感しました。新しいこどもも熱心に稽古に取り組む姿が見られ、こどもたちは稽古や大会を通じて自尊心が芽生え、継続した努力の大切さや、規律や礼儀を重んじる心を学んでいます。



3月に行われたビーチトレーニング



4月に行われた昇級審査に参加したこどもたちと ADB のみなさん

●パキュット基金

ジャイラホームは資金不足が深刻で、スタッフの給料未払いが頻発しています。このためにスタッフが継続して働けないという事は子どもたちの親代わりである「ハウスペアレンツ」が頻繁に入れ替わるということを意味し、こどもたちの生活面にも精神面にも悪影響を及ぼし、児童が健全に成長できる環境を提供するという児童擁護施設の目的を果たすことが難しくなります。そのため本件では昨年度に引き続き、給料の半額を支援することでスタッフを支え、こどもたちが健全に成長できる環境を維持するという目的で給与支援を実施しました。

昨年度に引き続き ACTION 年会費に統合する形をとり、子どもたちの世話をするハウスペアレンツ6人、ソーシャルワーカー1名、スタッフ1名という計8名のスタッフの給与半月分である 22,828 ペソを毎月支援しました。



ジャイラホームの子どもとスタッフ、日本人キャンパーと



ハウスマザーと子ども

盲ろう学校(ニニョスパグアセンター)自立支援事業

実施場所：サンバレス州オロンガポ市オールドカバラン町

実施期間：平成 23 年 1 月～同年 12 月

ニニョスパグアセンター（以下センター）は、フィリピンの NGO によって運営されている、主に盲・聾啞者を対象とした自立支援施設です。当会では 1998 年より活動の支援を行っています。本年度は、口唇口蓋裂、内反足、水頭症患者の医療事業支援、センター内に暮らす子ども達へ学用品の寄付、奨学生の学費及び学用品支援を行いました。また、前年度に引き続き 1 名の手話講師への給与支援も実施し、4 月からは新たにもう 1 名の手話講師の給与支援も開始しました。

●医療事業支援

センターでは、口唇口蓋裂、ヘルニア、内反足など、体に障がいを持つ子ども達にスポンサーを募り、手術を提供しています。

1) 口唇口蓋裂患者

本年度は、6 名の口唇口蓋裂患者の手術を実施しました。提携の病院がマニラにあるため手術自体は無料でできますが、手術を受けるための検査費や交通費、また診断の結果、投薬することから治療を開始する子どももいるため、薬代などの支援も行いました。

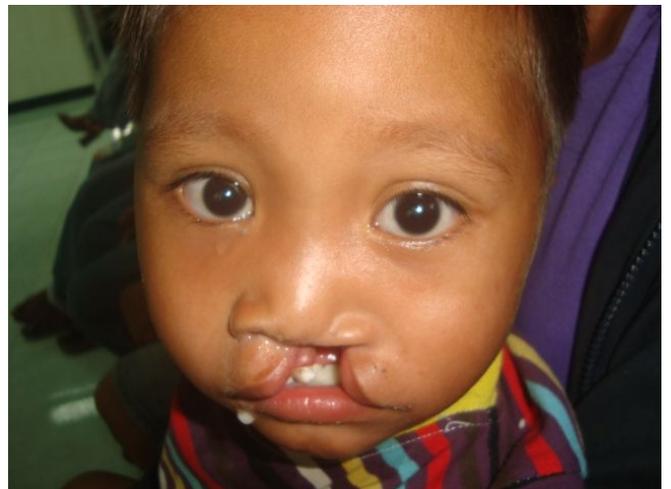
2) 内反足患者

前年度に引き続き、センターに暮らす内反足の子ども 1 名の治療を実施しました。治療自体は無料で行ってもらえるため、マニラの病院までの交通費や食費、矯正器具費などの支援を実施しました。2 ヶ月に 1 度の定期健診では、足の異常は見られず、このまま矯正器具を着けて生活し、経過を観察していくことになっています。

足の成長に伴い、矯正器具も一度新しいものにしました。今後も、患者の成長の妨げにならないよう、矯正器具を定期的に交換していく予定です。

3) 水頭症患者

本年度は、1 名の水頭症患者の手術を実施しました。まだ追加で手術が必要であるため、現在も治療中です。



口唇口蓋裂の子ども(手術前)



口唇口蓋裂の子ども(手術後)



内反足の子ども（矯正器具着用）



水頭症の子ども（治療中）

●**奨学生の学費及び学用品支援**

前年度に引き続き、自宅からセンターに通っている聾啞の子ども1名に学費と学用品の提供を行いました。来年も、引き続き支援を行っていく予定です。

●**手話講師の給与支援**

前年度同様、センターの手話講師1名に毎月半額の給与と支援を行いました。また、4月より、もう1名の手話講師の給与と支援を開始しました。こちらの手話講師には、毎月4分の1の額の給与と支援を行っています。

●**学用品の寄付**

本年度は、ノートや白紙、ボールペンを中心に、学用品の寄付を3度実施しました。ノートや白紙などの消耗品が足りないことが多いため、来年も定期的に学用品を寄付していきます。



センターに通う奨学生



寄付物品を手にする子ども達

ストリートチルドレン支援事業

実施場所：サンバレス州オロンガポ市及び周辺地域

実施期間：平成 23 年 1 月～同年 12 月

当会では、2005 年よりストリートチルドレン・貧困地域支援、児童の権利の啓発等の活動を行っている
フィリピンの NGO タタッグ(Tayo Ang Tinig At Gabay = 私達自身が声であり道である)と提携し、
こどもたちの奨学支援や貧困地域のインフラ整備、ライブリフッド事業の支援を行っています。
活動 7 年目になった本年は下記の 3 つの活動を実施しました。

●奨学生支援プロジェクト

今年で 7 年目となる本プロジェクトでは、昨年度に引き続き、奨学金支援を行っている NGO 団体、「Growing People's Will (GPW)」からご協力をいただき、ストリートチルドレンへの奨学金支援を行いました。昨年度は 6 名のこどもたちを支援していただきましたが、今年度は更に 4 名のこどもたちが加わり、計 10 名の子どもたちをサポートしていただきました。こどもたちの多くが放課後や週末になると路上に働きに出たり、ごみ拾いをしたりしながら家計を助けています。これまで、安定した収入がない・兄弟が多いなどの理由から、きちんと学校に通うことが難しい状況にありましたが、学費、文房具、交通費などの支援を受け、現在はほぼ毎日学校に通うことができるようになりました。支援が始まった当初は人前に出て話すことが苦手な子や活動に集中できない子もいましたが、最近ではタタッグが行っている活動にも進んで関わるようになり、積極的に発言する子も増えてきました。来年度も引き続き、GPW にご協力いただき、奨学生の支援を行っていく予定です。

また、今年度よりタタッグのストリートエドゥケーター 1 名への奨学支援がスタートしました。奨学生のマラは現在、大学でソーシャルワーカーになるための勉強をしています。当会でマラの奨学支援をしてくださるスポンサーを募集し、現在 15 名以上の方がサポートをしてくださっています。

タタッグには現在、ソーシャルワーカーがいません。しかし、タタッグがサポートしているこどもたちはみんな生活環境が厳しく、家庭にさまざまな問題を抱えていることが多いため、精神的な面でもサポートをしてくれるソーシャルワーカーを必要としています。タタッグでは、現在支援をしているこどもたちの中で、大学でソーシャルワークのコースを学

ぶことを希望しているこどもを、将来タタッグのソーシャルワーカーとして採用したいと考えています。外からソーシャルワーカーを雇うのではなく、現在タタッグがサポートしているこどもたち 1 人 1 人をよく知っている人をソーシャルワーカーとして育てたいというのがタタッグの願いです。しかし、現在タタッグにはそのための学費を支払う余裕がありません。そこで、当会ではスポンサーとなってくださる方を募集し、タタッグの活動とこどもたち、そして、「ソーシャルワーカーになりたい」というマラの夢をサポートすることになりました。

マラは今年 6 月に大学に進学し、大学生活をスタートさせました。新しい環境に慣れるまでは不安になることも多かったようですが、何事にも真面目に取り組む性格は変わらず、毎日の勉強、学外研修、タタッグでの活動など様々なことに全力で取り組んでいます。また、タタッグの新人ストリートエドゥケーターとして、ストリートエドゥケーションと呼ばれる路上での教育活動を行っています。活動中は参加するこどもたちをまとめるリーダーとして、またこどもたちのお姉さんの存在として活躍をしています。

当会では、来年度も引き続きマラの奨学支援を行っていく予定です。



GPWの奨学金支援を受けている子どもたち

●コミュニティ改善プロジェクト

本プロジェクトは、タタッグが支援を行っているオロンガポ市内及びその周辺地域から要請を受けた小規模のプロジェクトに対し、支援を行うものです。

7年目を迎えた本年は、下記の2ヶ所にてプロジェクトを実施いたしました。

・プレイグラウンド建設

実施場所：バタアン州ハーモウサ町ティポ地区

実施時期：平成23年2月～3月

ティポ地域では、過去にコミュニティ改善プロジェクトとしてECCD建設を行いました。本年度はプレイグラウンドの建設を行いました。当地域にはこれまで子どもたちが体を使って遊ぶことのできる遊具を設置した公園がなく、ほとんどの子どもたちが地域内の限られた場所で遊んでいました。そこで、地域の子どもたちが体を使って思い切り遊びながら、友情を育むことができるよう、本プロジェクトを通じてサポートを行いました。本プロジェクトは2月・3月のワークキャンプに合わせて実施し、キャンプ参加者が建設のためのワークを行いました。

プロジェクトの実施にあたり、学生団体YELLの皆様にご協力をいただきました。チャリティーフットサルを開催し、集まった収益を建設費用として寄付していただき、建設作業では、スタディツアーに参加してくださったメンバーのみなさんが遊具の塗装作業等のワークを手伝っていただきました。

完成後の公園は毎日子どもたちで溢れ、たくさんの子どもの笑い声が聞こえてくるようになりました。現在では、この公園が放課後や休日に子どもたちが集まる場所となっています。

なお、当会によるプロジェクトはここで終了しましたが、

地域の行政が責任を持って今後の運営・管理を行うため、プロジェクト後、公園の周囲にはフェンスが設置されました。また、今後は遊具と遊具の間隔をあけて子どもたちがより遊びやすい環境づくりを行う予定です。現在、各遊具を最終設置するための場所を整備しており、整備が終わり次第、最終設置場所に遊具を移動させて本完成となります。



塗装前の遊具で遊ぶ子どもたち

・ECCDセンター兼ミーティングスペース設置

実施場所：バタアン州ディナルピハン町ローズベルト地区

実施時期：平成23年8月～12月

8月・9月のワークキャンプでは、ローズベルト地域にて、ECCDセンター（就学前児童のための学習教室）を設置しました。

当地域には電気や水が通っていないなど生活環境が厳しい家庭も多く、小学校に上がる前に幼稚園に通うことができない子どもたちも多いため、以前より地域住民からECCDセンター建設の要望があがっていました。建設プロジェクトを行うにあたり、ローズベルト地区の行政より、ECCDセンターを建設するための土地を提供していただきました。また、すでにその土地に建設されていた行政の守衛所をそのままECCDセンターとして使わせてもらうことになったため、今回の建設作業では、旧守衛所をECCDセンターとして使うための改装工事、センター横への新たな守衛所の設置、子ども用トイレの設置、そして、子どもたちに栄養ある食事を提供するためセンター裏にキッチンを設置を行いました。

本プロジェクトは亜細亜大学ボランティアセンターの皆様

にご協力いただき、実施いたしました。チャリティーフットサルを開催して集めてくださった寄付を、資材費の購入と大工さんへの手当として使わせていただきました。また、13名の方が実際に現地を訪問し、建設作業を手伝っていただきました。

現在、完成後のセンターには約15名の子どもたちが通い、勉強をしています。また、センターの運営は、当地域の母親メンバーが行っています。なお、以前は母親グループのミーティングスペースがなく、雨が多く降る雨季は定期的にミーティングを行うことができませんでしたが、現在は当センターを使い、天候に左右されずに定期ミーティングを開催できるようになりました。



完成した教室での授業の様子

●タタッグライブリーフードプロジェクト支援

前年度に引き続き、今年度も「アルミパックジュースの袋を再利用したリサイクル商品」の製作を行いました。前年度よりも商品の質があがり、完成度の高い製品を製作できるようになったほか、製作者のお母さんが積極的にアイデアを出してくれるようにもなりました。更に、今年は過去のワークキャンプ参加者が計120点以上の商品をオーダーしていただき、学校の文化祭で販売していただきました。初めて入った大きな注文に喜び、そして戸惑いながらも、製作者のお母さんやタタッグのスタッフと協力し、製作・検品・発送作業を行いました。この回のオーダーのみでも前年度を上回るほどの売り上げとなり、タタッグや製作者のお母さんにとってとても大きなサポートになりました。今後もこのような形で注文をいただけるよう、来年度は広報やマーケティングにも更に力を入れて活動していきます。

また、今年度はジュースパックを使った商品以外のライブ

リフッド商品の開発にも力を入れて活動を行いました。今年度商品化を目指したのは、レジ袋を使って作ったバッグやポーチ、雑誌などの紙を再利用して作ったアクセサリーなどです。また、商品開発にあたっては、過去のスタッフ参加者の方が商品開発ボランティアとして協力していただき、様々な商品のアイデアを出してくださいました。

一部は商品化し、すでに日本のチャリティショップやイベント等で販売を行っています。来年度は更に活動の幅を広げより多くのお母さんの支援を行っていくため、本事業の一部を当会の「女性のための所得向上事業」に組み込み、新商品の開発や製作者のお母さんの育成等の活動を行っていく予定です。



ジュースパックを再利用して作ったライブリフッド商品



レジ袋を使ったバッグを製作中のお母さん

国際ボランティア体験事業

国際協力とフィリピンの子どもたちを取り巻く環境をより多くの市民の方に知っていただくために当会では設立当初の1994年よりワークキャンプという形で国際ボランティア体験事業を実施しています。本年度は107名の方が全国から参加をしてくださいました。しかし、5年前には200名を数えた参加者数が年々減少してきており、その原因として経済不況や旅行代理店や大学が同じようなプログラムを実施している事や、フィリピンの治安に対する不安感が挙げられます。国際ボランティア体験事業が占める事業収入の割合が多い当会としまして、その対策として学生ボランティア団体や企業・有志のグループ向けにオーダーメイドのスタディツアーやフィリピンでの研修など、多くの方に参加していただけるプログラム作りを行いました。その結果、個人、学生団体や美容業界の方など、多くの方々が国際ボランティアに参加してくださいました。

●ジャイラホームワークキャンプ

- ①平成23年2月8日～2月21日 4人
- ②平成23年2月24日～3月9日 4人
- ③平成23年3月13日～3月26日 9人
- ④平成23年8月4日～8月13日 2人
- ⑤平成23年8月16日～8月29日 11人
- ⑥平成23年9月1日～9月20日 8人

本年度の当会ジャイラホームワークキャンプは、春に2週間キャンプを2本、3週間キャンプを1本、夏には10日間、2週間、3週間のキャンプをそれぞれ1本ずつ開催しました。本年度のキャンププログラムの特徴としては、様々な期間のプログラムを行い、より多くの選択肢の中から参加者に選んでもらうことができる環境づくりに努めました。これによって参加者のニーズを把握することができたため、来年度以降のプログラムづくりに生かしていきます。

また、本年度のキャンプより、新しくジャイラホーム近くのサンホセという地域のデイケアセンター（保育園）の建設に取り掛かり、まっさらの土地から建設をスタートしました。ホームステイプログラムも同地域にて実施しました。ワーク作業はジャイラホームの外になりましたが、ジャイラの子どものアクティビティ企画やプール遠足などは例年通り実施し、キャンプ終盤のさよならパーティーも、ワーク地とジャイラホーム、2箇所に分けて行いました。

●ストリートチルドレンワークキャンプ

- ①平成23年2月10日～2月23日 3名
- ②平成23年3月3日～3月16日 8名
- ③平成23年8月4日～8月17日 2名
- ④平成23年9月8日～9月21日 5名

本年度は、例年3週間で行っていたプログラムを2週間に変更し、キャンプ数も年2回から4回に増やして開催しました。春季のワークキャンプでは学生団体YELLの皆様より寄付をいただき、タタッグの支援地域ティポにてプレイグラウンドを建設しました。参加者は、子どもたちと交流をしながら遊具の塗装作業等を行いました。

また、夏季のワークキャンプでは、亜細亜大学ボランティアセンターの皆様へ寄付をいただき、タタッグの支援地域ローズベルトにてECCDセンター（就学前児童のための教室）を建設しました。地域住民からの要望は数年前からあがっており、今回、寄付をいただいたことでようやく実現することができました。建設作業は参加者と地域住民が協力して行い、お互いに交流を深めることもできました。

各キャンプとも2週間盲ろう学校に滞在し、子どもたちと日々の生活を共にし、様々なことを感じてもらうことができました。また、毎回キャンプの恒例イベントになっている子どもたちと海水浴にも出かけ、一緒に体を動かして思い切り遊びました。週末にはタタッグが行っているストリートエデュケーション（路上での教育活動）にも参加し、子どもたち

との交流を深めるとともに、参加者自身が企画したアクティビティも実施しました。ホームステイプログラムでは、フィリピンの一般家庭の暮らしを体験し、家族の温かさやフィリピンの文化や日常の生活に触れることができました。

●スタディツアー

- ①平成 23 年 3 月 19 日～3 月 24 日 10 名
- ②平成 23 年 8 月 25 日～8 月 30 日 8 名
- ③平成 23 年 9 月 22 日～9 月 28 日 10 名

春のプログラムは、前年度までと変わらず、当会の事業地への訪問やホームステイ、マニラのごみ山訪問等を行いました。

夏のプログラムは、春と同様に、事業地訪問やホームステイ、そしてオロンガポ市内のごみ山や 2009 年度からスタートしたエコミスマ事業の製作現場を訪問しました。

●オーダーメイド スタディツアー

- ①平成 23 年 2 月 26 日～3 月 4 日 10 名
- ②平成 23 年 9 月 3 日～ 9 月 9 日 13 名

本年度は、①学生団体 YELL さんと、②亜細亜大学ボランティアセンターさんのオーダーメイドスタディツアーを行いました。当会が協働で事業を行っている現地 NGO タタッグの支援地域に、学生団体 YELL さんよりプレイグラウンドの設置費用を、亜細亜大学ボランティアセンターさんより幼稚園設置費用の寄付をいただき、参加者のみなさんの希望をできる限り取り入れたツアーを実施しました。そのため、ツアー中には、当会の事業地訪問やホームステイプログラムを始め、ワーク作業も行いました。

国内事業

●チャリティショップ

オープンから 5 年目となったチャリティショップですが、2009 年のリニューアル以降、より多くの地域にお住まいの方々が訪れてくださるようになりました。しかし、フィリンへの支援をより多くするためにお店の方向性を再検討することになり、社会人のボランティアの方々にご協力いただきマーケティング会議を実施してきました。2009 年のリニューアル時には一般的なアジア雑貨店を目指し、お客様が入りやすいお店を目指しましたが、来年度は店頭でもアクションの活動をよりわかりやすく展示するなど、国際協力をより身近な活動に感じられるお店作りを行い、寄付金を増やせるようにします。今年度の寄付は総額 1,279,217 円でした。



「土曜学校～世界を知る会（小3～6年コース）～」

本事業は 2005 年以降継続して行っている講座です。昨年度までは武蔵野市教育委員会の主催でしたが、今年度からは公益財団法人武蔵野生涯学習振興事業団へ移管されました。それに伴い、開催場所も武蔵野総合体育館からむさしのプレイスへと移動しました。今年度は武蔵野市内の小学校に通う 4 年生～6 年生、計 25 名が参加し全 10 回の講座を行いました。例年同様、フィリピンの小学生とパートナーを組み、文通やビデオレター、JICA ネットでの交流を行いました。何年も続けてこの講座に参加をしているこどももいるのですが、その内の 1 人がこの文通をきっかけに英語を習いだし、3 年目の今年はお手紙をすべて英語で書いてくれるという嬉しい出来事もありました。



JICA ネットでの交流 こどもたちの集合写真

●学校教育との協働授業実践

本年度は以下の学校で協働授業を実践しました。各学校にあわせた内容の授業を実施し、文通やビデオレターの交換を行いました。

武蔵野市立第一中学校

武蔵野市立第四中学校（選択社会科）

武蔵野市立第四中学校（職場体験）

他

●講師派遣

フィリピンでの活動・経験を日本の地域社会に還元するため、代表の横田と日本事務局の長田を講師として各種セミナー、講演会に派遣しました。

武蔵野市教育委員会「土曜学校」

M I A 教員ワークショップ定例会

他

●ワークキャンプフォーラム

(1月9～10日、7月2～3日、10月23～24日)

本事業はワークキャンプの普及を目的として国立中央青少年交流の家と独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催するもので、当会は2007年度より運営委員として関わっています。本年度は1月に「若者に関わる人たちのための全国フォーラム」を実施し、3月の震災以降はワークキャンプでのノウハウを活かして東日本大震災の被災地で活動をする団体を中心に、「東日本大震災 青年ボランティアフォローミーティング」や「東日本大震災 緊急青年ボランティアミーティング」を開催し、アクションからは職員を派遣しました。

●ボランティア派遣

昨年度に引き続き本年度も三鷹市にある児童養護施設朝陽学園や日の出太陽の家へボランティアを派遣しました。派遣項目は以下のとおりです。

朝陽学園

週末遊びボランティア（随時）

バザー

●国際協力・交流イベント及び地域イベントへの参加

1) アースデイ(4月23日、24日)

昨年度から出店している代々木公園で行なわれるアースデイには2日間あわせて10万人の方が来場されました。ブースではsari sariとエコミスの物販を行ない、21名の方がボランティアとして手伝ってくれました。

2) グローバルフェスタ(10月1日、2日)

7年ぶりとなった日比谷公園で行なわれるグローバルフェスタには12名のボランティアが来てくださり、物販以外にも海外ボランティアの説明会を行ないました。2日間あわせて11万人の方がいらっしまったそうです。

3) よこはま国際フェスタ(10月22日、23日)

荒天のため22日は開催中止となってしまいましたが、23日はお天気も回復し2万8千人の方が来場してくださったそうです。ブースではsari sariとエコミスの物販を行ないました。

4) むさしの国際交流まつり(11月20日)

毎年参加しているむさしの国際交流まつりですが、今年は物販の他にバナナシェイクとマンゴーシェイクの販売も行ないました。大学生や社会人のボランティアの他に地域の小学生もお手伝いに来てくれました。

●会員企画

当会の会員様が主体的に活動を企画・運営する活動です。本年度、以下のような活動がありました。

1) チャリティバーベキュー(5月29日)

今年もチャリティバーベキューを開催予定でしたが、雨天中止となりました。

2) 出張チャリティショップ

本企画は大学の学園祭や地域のお祭りなどでチャリティショップの品物の貸し出しを行い、チャリティショップと同じ仕組みで出張チャリティショップを開いていただくという活動です。今年度は長野県立中野西高校、東京国際大学、北海道教育大学、群馬県立健康科学大学、昭和女子大学、早稲田大学の学園祭で出張チャリティショップが行われました。

2・クリーニングの和光（西東京に本社を置くクリーニング会社）

概要：2008年3月にオープンしたクリーニング工場では、児童養護施設であるジャイラホームの運営資金獲得と施設卒業生への雇用創出を目指して運営が進められ、施設の卒業生が工場長を務めました。

オープン当初は法人向けのクリーニング工場として運営していましたが、その後、カステリヤホスマーケット、バレート地区にそれぞれ受取所を設け、一般家庭も対象にし、収益の50%はジャイラホーム運営へ、50%は当会へと振り分けられ孤児院以外での活動にあてていました。

現在の状況：

本年度6月までジャイラホーム内で運営を続けた同工場は、7月に工場の機械などをオロンガボ市サンタリータ地区に新築された工場に移動し、ジャイラから独立する形で8月より新工場での運営を開始しました。これまでのジャイラホームの敷地内では、より大きな規模で実施しようとする課税対象になってしまうなど、営業に制限が出てきてしまいました。そこで、より積極的に営業を行うため、工場をジャイラの外に新たに建設し、事業を拡大していくことになりました。そしてこの移転に伴い、さらなる設備投資と広報が必要で当面は収益が見込めないため、また卒業生や地域の雇用創出に専念するために、収益からのジャイラホームや当会への支援は終了し、当会からの収支報告や活動報告も終了となりました。

新工場では、以前同様孤児院の卒業生が工場長を務め、バレート地区の法人客などはそのままに、機材を日本から新たに追加するなど工場の規模を拡大しました。新たな受け取り所なども設け一般家庭の個人客も集めながら新たな地でさらなる営業拡大を目指し運営を続けています。

ジャイラホーム内の旧工場には「クリーニングの和光」社長である佐藤様より機材を数点残していただき、今後はジャイラホーム内で日々の洗濯やワークキャンプ実施時など、私用目的として活用していく予定です。